

子宮がん検診（施設）

動 向

平成16年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん15,598名（前年度比296名減）、体がん2,550名（前年度比5名増）であった。受診者数は前年よりも減少した。

子宮頸がんは女性のがんでは7番目に多く、女性のがん全体の6%を占めています。しかし、早期に発見されると治療の可能性も高い為、検診検査が有効とされます。

子宮頸がんの原因としては様々な因子がありますが、性感染症であるヒトパピローマウイルスが関与している為、必要に応じ教育・指導の実施が必要である。

又、20歳代・30歳代の病変検出率が高いことを踏まえ、若い年齢層の検診の受診、子宮がんへの理解・リスクファクターの認識を高めることが必要不可欠となる。

子宮がん検診

2004年度の子宮頸がん検診受診者数は17261名、年齢階級別では、50歳代が最も多く、次いで40歳代、30歳代の順である。初診の割合は26.6%、年齢階級別では、29歳以下76%、30歳代50.2%、40歳代25.3%、50歳代17.9%、60歳以上15.9%と、加齢に伴って低下している。要精検率0.62%、要再検率1.10%、両者合わせた要精検率は1.72%である。検出されたがんは10例で、子宮頸がん9例（扁平上皮がん0期4例、1a期4例、1b期1例）と体がん1例（I期）である。がん発見率は0.06%、初診に高く（0.20%）、年齢階級別では、29歳以下0.24%、30歳代0.16%、40歳代0.04%の順で、初診の割合と同じく、加齢に伴って低下している。頸がん9例中、早期がん（0期、1a期）が8例（89%）と高率に検出され、早期診断、早期治療を目的に、当該症例の方々の人生に多大な貢献をしたことは当協会施設検診の絶大な効果である。検出された異形成は69例（軽度53例、中等度7、高度9例）である。異形成発見率は0.40%、初診に高く（0.59%）、年齢階級別では、29歳以下が最も高く（0.97%）、次いで30歳代

（0.88%）、40歳代（0.33%）の順で、加齢に伴って低下している。検出された頸がん、異形成の頸部細胞診クラス別病変検出率は、クラスⅡ再検12.9%、Ⅲa75.9%、Ⅲb79%、Ⅳ84%、Ⅴ100%と適正である。クラスⅡ再検は、要精検、精検不要の区別が出来なかった判定保留群であり、本来のクラス分類ではないので、感度、特異度など精度管理総合評価のためのデータとして利用できませんが、頸がん0期1例、体がんⅠ期1例、異形成19例を検出できたことに大きな評価がある。本年度の子宮頸部細胞診精度管理総合評価（病変有無追跡確定率70%）は、感度100%、特異度99.9%、正診率99.9%、陽性的中率79.5%、陰性的中率100%と適正である。

子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は2,550名で、頸がん検診受診者数の14.8%である。吸引チューブが挿入できず、経膈超音波による内膜厚測定に変更した症例（細胞採取不能例）66名を除いては、増測式吸引法による内膜細胞診を実施した。内膜細胞診の結果、要再検12例、要精検5例（疑陽性3例、陽性2例）の再精検が指示された。その内要精検から、体がん2例（0期、1a期の早期がん）、要再検から、内膜増殖症1例が検出された。細胞採取量不十分のための判定不能例は56例（2.1%）であった。

卵巣がん検診

一次検診で内診の結果異常を触知された方、または希望者に対し経膈超音波法、腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設しています。2004年度の受信者数は286名（全年度307名）である。その中から、卵巣がん0例、卵巣のう腫19例が発見されました。

関係の集計表は80頁に掲載